

## 自然科学施設における口頭解説の導入と実践について

大淀川学習館  
主事 勝家 伸男

研究成果の概要：既に一定の評価をいただいている本館のハード面を最大限生かす方法には、職員による口頭解説の充実が非常に有効である。実践するには、職員の資質向上が欠かせないが、大淀川をテーマとした自然教育の拠点として本館が発展するには不可避の課題である。

### 1. 研究の背景

本館は館内で昆虫や魚類の飼育展示を行っている。また、屋外には「里山の楽校」や「大淀川 水辺の楽校」があり、フィールドそのものを一種の展示物としている。また、こうした周囲の環境を生かした事業を「植物採集で自由研究」「身近な生き物を探そう」「昆虫標本作りにチャレンジ」等、多岐にわたり実施している。

本館の運営方針に「『いつ来ても、何かが違う』学習館を目指す」とある。動植物の展示は、日々形態が変化するため、写真や文字の解説板等による固定された解説は、高い頻度で更新することが必要であるが、その即時性は限界がある。

この問題を解決する為、先進施設は職員による、定期的な口頭解説が充実している。

本館では、団体見学の一部や、魚への給餌を通して捕食行動を解説する「さかなたちの食事タイム」の他、ミニ講座等で職員が口頭解説を行っている。しかし、施設内、里山や河畔に関する定期的かつ本格的なガイドツアー・口頭解説は実施していない。

### 2. 研究目的

本館の学習効果を高め、利用者の満足度向上に寄与するため、様々な対象を想定した口頭解説、ガイドツアーの導入を目的とする。

### 3. 研究の方法

先進施設へのヒアリング及び、ガイドの参加を通じて、情報収集を行う。また博物館等施設に関する書籍からも論拠を得る。

これらをもとに、ガイド導入の留意点、口頭解説手法等の情報を収集し、本館に適した口頭解説について検討する。

なお、本研究の分野について、理論に基づいた研究成果が不足しているため、現地視察やガイドツアーへの参加、指導者に向けた実践書などを論拠とした。

### 4. 研究成果

(1) 大淀川学習館の利用者層は幅広く、乳幼児から高齢者まで様々な目的で利用する。その為、本館が伝えたい自然科学についてのメッセージや、地域河川である大淀川の魅力を、展示物のみで全ての利用者へ効果的に伝えることは困難である。

多くの博物館では同様の問題を抱えており、それを解決するために、「機器」や「映像」、タブレット方式やデータベース方式に見られる「情報機器」利用、「文字」解説、そして「人」による口頭解説や実演、ギャラリートークを行っている。1)

ギャラリートークとは、特定のコレクションや企画展の場合に、特定のテーマに絞って学芸員が重点的に行うものである。少人数を対象にその資料の具体的、専門的な内容などについて解説するのが一般的であり、学芸員の小研究発表的な性格を持つことになる。直接学芸員の顔を見ながら内容を聴き、疑問の答えを確かめることができるという点で、参加者にとっては魅力的な手法といえる。1)

職員による解説は一般的な方法であり、学芸員が解説に当たることが望ましいが、こだわる必要は無く、欧米では展示解説員やボランティアが担当する博物館が増えつつある。講師 (docent) ・案内者 (instructor) ・解説者 (interpreter) ・などの展示解説員、教育担当者 (educator) が育成され、観覧者に直接口頭解説を行っている。我が国でも同様の解説活動が活発化しており、知識やコミュニケーション技術などの研修を経て、ボランティアや解説員が学芸員をカバーする役割を担うこともありうる。1)

一般的な博物館施設では展示解説員の養成にあたって、利用者の印象や学習成果が解説員により大きく差が出ることを避け、マニュアルやガイドラインを作成して統一的に実施することに留意する。

解説員に必要な研修は①接客に対する態度、②展示と資料に関する知識、③コミュニケーションの技能、④安全管理と緊急事故対応が主な内容である。2)

このような職員の資質向上に取り組むとともに検討すべきは、本館のような自然科学をテーマとして、屋外フィールドも備える施設にはどのような口頭解説が適しているのかという課題である。

(2) 本研究にあたり、ガイドを実施する施設担当者へのヒアリングを行った他、先進施設でのガイドツアーを体験した。

まず、本館も参加している「自然体験施設ネットワーク」の各施設から口頭解説・ガイド実践についてアンケートを実施・回収し、貴重なご意見をいただいた。「自然体験施設ネットワーク」とは九州内の自然に関する教育施設・ビジターセンター間の情報交換を目的に設立された組織である。

#### ①ガイドの実践内容

- ・火山の歴史や噴火災害
- ・展示解説。生体展示に関連した給餌解説や工作的レクチャー。
- ・10名以上の団体を対象にガイドを実施。季節の見所を踏まえ、ピックアップ。
- ・展示解説と火山実験。阿蘇火山の地形や地質、草原の成り立ち、動植物に関するフィールド学習。
- ・屋内は実施なし。屋外は諫訪の池周辺のガイドを30分と60分に分けたコース設定。予約不要・料金は無料。早朝に宿泊者を対象にガイドを実施。こちらも予約、料金は無料。

#### ②ガイド実践の頻度

- ・事前に希望を聞いて実施するが、予約が無くとも対応できれば案内。
- ・館内は希望に応じて随時実施。屋外は要望に応じて有料実施。観察会は毎月実施。

- ・1年間に100回程度。約2,800人。
- ・修学旅行の小中高生や地元小中学生、一般を対象に1グループ20～30人。年間1万人。

#### ③参加者の世代に応じた留意点

- ・普賢岳噴火を知る世代かどうか。実体験に基づいた内容。高齢者の場合は短時間。
  - ・難しい用語を使用せず方言を交えゆっくりと大きな声で。安全管理に特に配慮。参加者の歩調に合わせる。歩きやすい場所で実施。
  - ・年齢や体力に応じて距離や難易度を調整。
- 野鳥観察は、子どもの声で野鳥が逃げることがあるため、子ども班を作つて後方に配置。自然遊びを交えて運営。
- ・学校と打ち合わせを行い、子どもたちには特に実験を多用。わかりやすい言葉を使用。

#### ④工夫点・苦慮している点

- ・常勤が少ないため大人数に対応不可。
- ・写真・ぬいぐるみなどガイド用ツールを準備。公共交通手段の利用等、参加者の予定を確認して時間を配分。
- ・ガイドの質が個人スキルに依存。施設として一定の質を確保するため、ガイド研修や技術の共有化が必要であるが、実施が困難。
- ・インターパリターの質の維持、組織運営に苦慮。

ガイドの実践について、判断した留意点は下記の通りである。

- ◆対象に合わせた適切なガイド内容作り。
- ◆組織内、案内対象との事前の打ち合わせ。
- ◆人材確保の為の努力。
- ◆単純な説明だけでなく、何らかの自然体験を提供するガイド活動の実践。

図1は国立科学博物館（東京都）で行われるギャラリートークの様子である。



図1【2014/12/7撮影】

「ディスカバリートーク」という名称で休日に1日2回、各分野の研究者が利用者に解説を行う。参加当日は、山中湖に棲息する「フジマリモ」について研究を行っている学芸員が、解説を行っていた。書籍や文献で未発表の、現在進行中の研究についてのトークは、参加者を大きく惹きつけ、終了後も質問が絶えない様子が印象に残った。

内容は専門的なものと、初心者向けの内容と分けられ、難易度が事前に告知されているために、利用者は参加しやすい。



図2【2014/12/6撮影】

図2は上記の国立科学博物館の施設である筑波実験植物園（つくば市）で、特別企画展「植物化石展 タイムトラベル！5億年の植物進化」に併せて行われた「みどころガイドツアー」の様子である。

先に述べたディスカバリートークのように、企画展を担当した研究者が、利用者に解説を行う点は同様であるが、聴講するだけでなく、複数の会場と屋外を周りながら解説を受けるガイドツアーの要素も含まれていた。

未就学児から高齢者まで幅広い参加があり、進行には以下の配慮があった。

- ◆何について解説するのかを事前に説明。
- ◆終了時間等の時間配分をあらかじめ説明。
- ◆定期的に参加者の理解の度合いを確認。
- ◆クイズ等を交えて飽きさせない工夫。
- ◆質疑応答時間を充分に確保。

特に最後の質疑応答は1時間以上にも及び、参加者のテーマに対する関心の高さと、ガイドへの期待の大きさを感じた。

(4)博物館類似施設や自然体験を目的とした施設では、ガイドや案内人の活用を行っているが、同時に人材の確保に苦慮している。

この問題を解決するため、多くの施設ではボランティアグループを設立している。各地の国立公園では観察活動や美化清掃などを目的に「パークボランティア」を募集し、国立公園の利用案内を行うビジターセンターなどが活用している。

ボランティア導入の利点のひとつは、報酬が発生せず、運営コストが抑えられることがある。また地域からボランティアを募ることで、住民とのコミュニケーションがなされる点でも意義がある。また職員とは異なった視点から利用者と接することでサービスのクオリティ向上が見込まれる。長期にわたってボランティア組織を運営していくことで、知識や技術が蓄積され、利用者の満足度向上に寄

与していくことも予想される。

こうしたボランティアの導入には、ポジティブで非常に有用なイメージをもたれことが多いが、一方で多くの問題もある。

第一に費用の問題である。ボランティアとは、無報酬で行う社会奉仕活動であるが、導入に伴い組織として発生するコストもあり、その確保が難しい状況もある。

キャリアの異なる志望者でも、ガイドの質については職員同様の責任が伴う。施設の理念を正確に理解し、正しい知識を持って適切な活動を行うには、様々な分野のトレーニングが必要となる。

先進施設では複数回の研修を経てガイド活動を開始する場合が多く、また接客マナーや避難訓練、AED講習など、コミュニケーションや安全管理に関する研修も必要となる。

これらの研修を、職員が講師役となって担当する場合も多く、職員を雇用する場合と、同等のコストが必要となるという声もある。

職員の人事費に加え、研修実施費用、会報の郵送、活動にあたってのボランティア保険などを施設が全面的に負担している場合もあり、ボランティア組織によっては交通費を支出したり、食事を準備したりしている。

また基本的に自由参加であることから、勤務シフトが編成しづらく、施設の意向に沿った人員配置が困難となる。

このようにボランティア導入は、費用・時間・人的なコストが必要となり、無報酬という利点から安易に行うには問題が多い。

しかし、地域住民との協働という観点や、施設職員と利用者を繋ぐ人材という観点から価値ある取り組みであるのも事実である。

ボランティア導入以降、指導は職員が行うため、やはり職員自身の解説員としての資質

向上が重要な課題となる。

(5) 本館は、未就学児を伴った保護者の利用や、園児教室に代表されるような保育所・幼稚園等の利用、春季・秋季の遠足、学習単元と関連付けた小学校の利用、また社会福祉施設や高齢者団体の利用と、様々な形態で幅広い世代の方から利用される。

幼児教育においては、近年の社会環境の変化に伴い、自然とのふれあいを経験せずに入園するケースが増えてきている。園で教育活動の中に、自然との関わりを取り入れることが必要となっている。

幼稚園教育要領や保育所保育指針では、指導のねらいや内容として、「（1）身近な環境に親しみ自然と触れ合う中で、様々な事象に興味や関心をもつ」「（2）身近な環境に自分からかかわり、発見を楽しんだり、考えたりし、それらを生活の中に取り入れようとする」「（3）身近な事象を見たり、考えたり、扱ったりする中で、物の性質や数量、文字などに対する感覚を豊かにする」とねらいを示している。<sup>3)</sup>

こうした教育・保育の現状からみても、本館のように生き物を飼育する館内と、里山や河畔の自然環境を体感できる屋外フィールドを兼ね備えた施設には、自然環境を取り入れ、積極的に自然体験活動を展開できる場所として大きなニーズが生まれている。

本館の屋内外の施設には、小・中学校の学習指導要領「昆虫と植物」「生物と環境」「自然と人間」等と合致する内容のものが多く、校外学習の場として活用されている。また、昆虫採集や植物観察といった「体験の重視」や「自然体験活動の充実」などは学習指導要領のいたるところに記載されている。

小学校では「生活」で「自分と地域の人々、社会および自然との関わりが具体的に把握できるような学習活動を行うこと」と示されている。「社会」では、「観察や調査・見学、体験などの具体的な活動を展開すること」とあり、「理科」では、「生物、天気、川などの指導については、野外に出かけ地域の自然に親しむ活動を多く取り入れる」とある。「道徳」では「ボランティア活動や自然体験活動を生かす」ことが記載され、「総合的な学習の時間」では「自然体験やボランティア活動などの社会体験等を積極的に取り入れる」よう配慮を求めている。<sup>4)</sup>

また、家庭においても、子どもたちに自然について学ばせたい・体験させたいというニーズは強いものの、保護者自身が自然体験の経験に乏しく、具体的な活動ができないという声も本館の利用者から聞かれる。

そんな中、家族で手軽に参加できるガイドや口頭解説は、本格的な野外活動の基盤として、子どもの最初の学びの機会となるだけでなく、家族全員が自然への親しみを高める貴重な機会となる。

保護者自身や高齢者にとっても、ガイドツアーや自然にふれる体験を行うことは、心身のリフレッシュと憩いの時間となる。また宮崎文化振興協会が取り組む回想法の一環としても、非常に有効な手法となると思われる。

(6)これまで述べてきた内容から、これまでの本館の各事業の方向性の正しさを確信とともに、ガイドツアーや解説活動の拡充は、本館の利用者層から大きなニーズを抱えていること、そして口頭解説の拡大が施設の価値を高めることができた。

本館は、里山の環境学習の場として、現在

改修が行われている屋外フィールド「里山の楽校」と、水辺環境と生き物のかかわりを学べる「大淀川 水辺の楽校」を利用できる。

屋外ガイドツアーにおいては、滑落や転倒事故や危険な動植物についてのリスクマネジメントが欠かせないが、本館周辺のフィールドでは安全面に配慮した一定の整備を行っているため、危機管理、事故対策がしやすいことも利点である。

展示物についてのギャラリートークは、学芸員が行うという原則から外れるが、園児教室での自然についての講話、魚の給餌観察やミニ講座という形式で、すでに本館で類似した取り組みを行っている。

しかし、これに加え先進施設で行われているような、小規模でありつつも、季節感を持って定期的に実施できるような口頭解説を、拡充することには大きな意義がある。

また、自然科学の初心者向け、興味関心の高い層向けといったような、ターゲットを絞ったギャラリートークも、魅力あるイベントとなる可能性が高い。

こうした口頭解説の実践には、職員の高い資質、専門性に加えて、コミュニケーションスキルや接客マナー、そして屋外における安全管理の知識などが必要である。

ボランティア組織を導入するにしても、職員の資質がガイドの質に直結することから、解説員としての更なる研鑽が求められる。

注意点として野外教育やガイドのプログラムには知的財産権が生じている場合があり、安易な他施設の模倣や書籍からの引用は充分留意する必要がある。

大淀川学習館は開館20周年を迎える、大淀川と、その流域の自然に関する魅力を発信していくにあたり、施設やフィールドといったハ

ード面がいよいよ整いつつある。

本研究を通して、本館が新たな領域を開拓し、ファンを獲得していくには、口頭解説の拡充は非常に有効な手段であることが確かめられた。そのため今後、更にソフト面である職員の資質向上が求められる。

本研究にあたり、先進施設の皆様からは、多大なご協力と、貴重なご意見を賜り、アンケート・研修会等からも大きな示唆をいただいた。この場を借りて厚く御礼申し上げる。

## 5. 参考図書、論文等

### 〔図書〕（計4件）

- 1) 大堀哲, 水嶋英治、学文社、博物館学Ⅱ、2012、125-128
- 2) 大堀哲, 水嶋英治、学文社、博物館学Ⅱ、2012、252-253
- 3) 日置光久他、社団法人日本ネイチャーゲーム協会、子どもと自然とネイチャーゲーム、2012、17-18
- 4) 星野敏男他、小学館、野外教育入門、2001、202-203